国立国語研究所学術情報リポジトリ

南琉球与那国方言における動詞のアクセント交替の通時的考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): Yonaguni dialect, verb, conjugation, tonal alternation, tonal change 作成者: 中澤, 光平, NAKAZAWA, Kohei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003693

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 24: 169–194 (2023)
ISSN 2186-1358

南琉球与那国方言における動詞のアクセント交替の通時的考察

中澤光平

信州大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

南琉球与那国方言には動詞のアクセントに A, Bb, Bc, Bcc, Bccc, C の 6 つのパターンが認められる。日琉諸語の多くは動詞アクセントの系列に 2 パターンの対立しかなく，与那国方言の 6 パターンもの区別が古いものか新しいものかが問題となる。本論文では，主に通時的観点から，非 A 型の交替パターンのうち，例外となる Bccc および C を除いた Bb, Bc, Bcc の違いは，語幹の長さと語幹末音に基づいて与那国方言で生じた改新であることを主張する。また，動詞アクセントと活用形をもとに，与那国方言にはかつて中止形と連用形の区別があったこと，アクセント上例外となる例は概ね通時的に説明可能であること，二重母音と撥音では音節量の扱いが異なることを主張する。動詞アクセント交替は，複合語などにも見られる C 型 > B 型という与那国方言に推定されるアクセント変化を支持する *。

キーワード：与那国方言，動詞，活用，アクセント交替，アクセント変化

1. はじめに

与那国島（沖縄県八重山郡与那国町）の主に 60 代以上の高年層で伝統的に話されている日琉諸語（琉球諸語を含む日本の諸言語，諸方言の総称）最西端の与那国方言では，動詞のアクセントが活用によって交替する。この交替がどのような原理に基づくのか，先行研究および筆者の調査データをもとに考察することが本研究の目的である。

なお，本論文では「変化」を「通時的に言語形式がかわること」に限定するため，活用を語形変化とはあえて呼ばない。共時的に言語形式がかわることは「交替」とする。

1.1 本論文で用いる記号

[ ]：音声表記。音韻的な表記を含み得る。〔例〕[ŋŋ ~ ŋg]

/ /：音韻表記。自明な場合は省略する。〔例〕/ka/「司」

// //：基底表記。本稿では原語幹の表示に用いる。〔例〕//kag-//「書く」

< , >：変化。〔例〕*kabur- > kaNd-「被る」

← , → , ↔：派生や交替。〔例〕kaguN ↔ kaɾi「書き，書いて」

~：音声や語形のゆれ。〔例〕Bc ~ Bb

::：対応。〔例〕kimo :: cimu「肝」

---

* 本稿は 2020 年 6 月に日本言語学会第 160 回大会にて「南琉球与那国方言における動詞のアクセント交替の共時的・通時的分析」と題して発表した内容（中澤 2020）を元にしている。また，本稿は国立国語研究所の共同プロジェクト「日本の消滅危機言語･方言の記録とドキュメンテーションの作成」（プロジェクトリーダー：木部暢子）および科研費若手研究 21K12993 の成果の一部である。

-：接辞境界。〔例〕tu-ʀa-N「取った」
=：接語境界。〔例〕=ja「～は」
+：語境界。〔例〕daN+nar-「暗くなる」
*：再建形（音韻表記）の前に付ける。
×：正しくない予測形の前に付ける。
†：確認できない形式の前に付ける。かつては存在したが現在は見られない形式を含む。
【】：筆者による補い。
「○：○から高くなる。
○˥：○の後が低くなる。
○˥˥：○の中で下降する（拍内下降）。
ˬ○：○が低く始まる。

2. 与那国島および与那国方言について [1]

2.1 与那国島

与那国島は沖縄県八重山郡に属し，八重山列島を構成する。沖縄本島からは南西へ約 509 km の距離があり，八重山列島の中心的な島である石垣島からも約 127 km 隔たっている。日本最西端に位置し，台湾とも約 111 km の距離にあり，西端の西崎（イリサティ）からは台湾が見えることもある。与那国町は与那国島の一島 [2] からなり，祖納，比川，久部良の 3 つの集落がある。面積は 28.96 km^2 で人口は 1,693 人である（令和 4 年 5 月末現在）[3]。

2.2 与那国方言

与那国方言は与那国島の主に 60 代以上の高年層で話されている。久部良で沖縄本島の影響が強いことを除けば，集落間の方言差はほぼない。与那国方言は母音音素が /a/, /i/, /u/ の 3 つ，子音音素が /ʀ/, /b/, /m/, /t/, /ʀ/, /d/, /n/, /r/, /c/ [ʦʔ], /s/, /k/, /ʁ/, /g/, /ŋ/, /h/, /ʼ/ の 16 個で他に半母音音素 /j/, /w/ と撥音 /N/ を有する（小型大文字の /ʀ/, /ʀ/, /c/, /ʁ/ は無気喉頭化音）[4]。無気喉頭化子音 /ʁ/, /ʀ/ は /k/, /g/, /t/, /d/ と弁別的である（〔例〕/ʁa/「司」，/ka/「皮」，/ga/「我」）。

3. 先行研究

本節では，与那国方言のアクセント体系および動詞アクセントに関する先行研究を整理する。

3.1 与那国方言のアクセント体系

与那国方言が三型アクセント体系（アクセント単位の長さに関わらず 3 つの型が区別される体

[1] 2 節については与那国方言辞典編集委員会編（2021: 29–30）や中澤（2022: 90）も参照。
[2] 厳密には，西崎の北北西にトゥイシと呼ばれる島（岩）がある（与那国方言辞典編集委員会編 2021: 3）。
[3] 以上の情報は与那国町ウェブサイト（https://www.town.yonaguni.okinawa.jp/docs/2018042800012/household.html）から引用した（2022 年 6 月 10 日にアクセス）。
[4] 促音，長音の認定については保留する。/ʼ/ は音節の切れ目を表す音素として導入する。

系）であることは，平山・中本（1964）で明らかにされている。本稿では上野（2010a, 2011, 2012, 2014, 2015）などの一連の先行研究に従い，3 つの型に A 型，B 型，C 型のラベルを与える。A 型は概ね高平調，B 型は概ね低平調で，C 型は A 型に似るが後続するアクセント単位を下げる。（1）に上野（2010b）による音調型一覧を挙げる。

（1）　a.　A 型　ˈna:「名」　haˈci「橋」　taˈTami「畳」　haˈnaburu「鼻」
　　b.　B 型　ˌki:「木」　ˌhana「花」　ˌtagara「宝」　ˌhurusaTa「黒砂糖」
　　c.　C 型　ˈwa˥:「豚」　haˈci˥「箸」　haˈTana˥「刀」　kuˈrisaTa˥「氷砂糖」

C 型の文節末の下降は ˈwa˥:「豚」のように重音節終わりでは音節内に下がり目が生じるが，軽音節では大まかな世代差があり，haˈci˥˥「箸」のように拍内下降として実現する場合（老年層に多い）と haˈci「箸」のように実現しない場合（若年層に多い）がある。（音声的）長母音と ai, ui はピッチの上昇と下降について同じように振舞うことから，与那国方言では ai, ui が二重母音であって 2 音節に分かれないことがわかる。上野（2010a）に従い，A 型に / = /，B 型に / _ /，C 型に /] / の記号をアクセント単位の末尾に付ける。

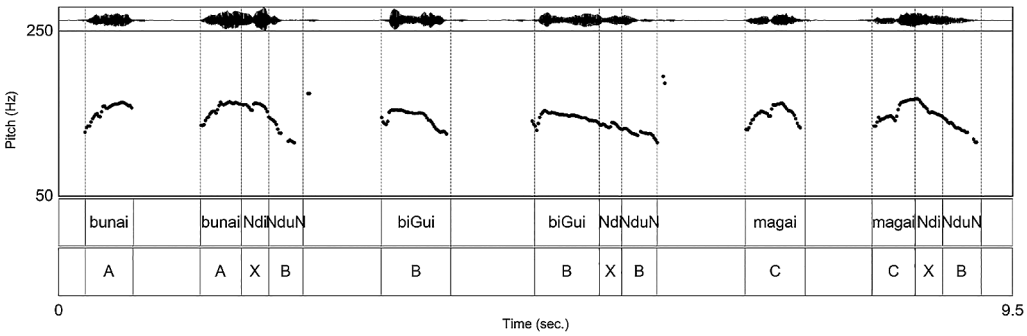

図 1　名詞のピッチ曲線（bunai=「姉妹」，biŋui_「クワズイモ」，magai]「椀」）[5]

与那国方言の A 型，B 型，C 型は，松森（2000, 2012）が示す琉球祖語に再建される系列別語彙の A 系列，B 系列，C 系列にそれぞれ概ね対応する。松森（2000, 2012）と上野（2011, 2015）から沖永良部と与那国の対応語を挙げる。

（2）

系列	沖永良部	与那国	意味
A	saki	sagi=	酒
A	ada	’ada=	ほくろ（〈あざ〉に対応）
B	amiR	’ami_	雨
B	ja:	da:_	家（〈や〉に対応）

[5] X はアクセントの指定のない「空の」アクセント単位を表す（cf. 中澤 2018）。

C	nabi	nabi]	鍋
C	hagi	haN]	足（〈はぎ〉に対応）

用言（動詞，形容詞）について，松森（2012）は，「本土祖語と同じく琉球祖語にも，動詞，形容詞に二つの系列があったことが推定でき」るとして，「A 系列」と「B 系列」を立てる（松森 2012: 34）。用言の 2 系列は，本土方言における類別語彙の第 1 類，第 2 類（金田一 1974）にほぼ対応する。松森（2012）と上野（2010a）から対応語を挙げる。

(3)	系列	沖永良部（正名）	与那国	意味
	A	asjibjuN	’aNbuN=	遊ぶ（第 1 類）
	A	hinjajuN	hiNnaruN=	減る（類別語彙対応語なし）
	B	utijuN	’uTiruN_	落ちる（第 2 類）
	B	hiNgijuN	hiNgiruN_	逃げる（類別語彙対応語なし）

すなわち，A 系列には A 型，B 系列には B 型が対応する。

3.2 与那国方言の動詞アクセント

ところが，与那国方言の動詞のアクセントは，活用によって交替することが明らかになっている。上野（2011）に挙げられている活用形の一部を抜粋して表 1 に示す。

表 1　与那国方言の動詞の活用形とアクセント交替

パターン／活用形	A 〔例〕巻く	Bb 〔例〕折る	Bc 〔例〕言う	Bcc 〔例〕書く	Bccc 〔例〕来る	C 〔例〕ある[6]
現在止	maguN=	buicaN_	NduN_	kaguN_	kuN_	aN]
2 過止	maтiтaN=	buicaтaN_	NтaN_	kaтiтaN_	suтaN]	aтaN]
現否止	maganuN=	buicanuN_	NdanuN_	kaganuN]	kunuN]	(aranuN])
～て	maтiтi=	buicasiтi_	Ndiтi]	kaтiтi]	siтi]	aiтi]

基本形（表 1 の「現在止」を本稿でこう呼ぶ）が A 型 / = / のものは活用形全てが A 型で一貫するが，基本形が B 型 / _ / のものは B 型で一貫するもののほかに，段階的に C 型 /] / と交替するものが見られる。基本形が C 型の動詞は活用形も C 型でほぼ一貫する。

動詞のアクセントが 2 系列の対立に収まらないことは他の日琉諸語にも見られるが，それらは分節音による変化や複合動詞に由来するなど二次的に生じたものと考えられる。例えば，東京では動詞のアクセント（基本形）は原則として無核か次末拍（penult）に核があるかの 2 パターンだが，次末拍が特殊拍や二重母音の後部要素の場合，次々末拍（antepenult）にアクセント核がずれる。

[6] aranuN] はコピュラの aN「である」の否定形で「違う」の意。「ある」の否定形は minuN]「ない」になる。

(4) オ「ト˥ス「落とす」，サ「ガ˥ル「下がる」；「カ˥エス「返す」，「ト˥ール「通る」
cf. オ「トサ˥ナイ，サ「ガラ˥ナイ；カ「エサ˥ナイ，ト「ーラ˥ナイ

また，京都で基本形が○○「○となる子音語幹（五段活用）の 3 拍動詞は複合動詞に由来する。

(5) アル「ク「歩く」< * 有り + 行く，ハイ「ル「入る」< * 這ひ + 入る（cf. 上野 2000: 54）

ところが，与那国方言の場合，分節音の条件もなく，単純動詞にも複数の交替が見られる。

表 1 のうち，C は不規則動詞の aN「ある」のみであり，Bccc は kuN「来る」，umuN「思う」の 2 語しか見つかっていないのでこれらを例外として扱うとしても，Bb，Bc，Bcc はそれぞれ一定数存在する。もしこの交替が語ごとに指定されているとすれば，話者は非 A 型の動詞がいずれのアクセントパターンに属しているかを動詞ごとに記憶していることになり，他方言と比べても記憶の負担の点で不自然である。また，通時的観点からも，それぞれのアクセントパターンを祖語に再建する必要があるか，すなわち，松森（2012）が B 系列としてまとめた動詞に更なる区別を設ける必要があるかが問題となる。

ところで，上野（2011）のデータを見ると，Bb パターンの動詞は kiduŋiraN「蹴る」，NnariruN「見える」，uduruguN「驚く」のように語形が長い語が多く，一方で Bcc パターンの動詞は cuN「切る」，ĸuN「吹く」，dumuN「読む」のように語形が短い語がほとんどで，最も長いもので haNĸuN「はじく」である。このことから，非 A 型動詞のアクセント交替は，語形の長さが関わっていることが予想される。

4. 調査と結果

前節で述べた先行研究の状況を踏まえ，与那国方言の動詞アクセントの活用による交替は語形の長さと関係するという仮説を検証するため，与那国島でのアクセントの現地調査および遠隔調査を行った。

4.1 調査内容

2017 年 12 月～ 2020 年 3 月に与那国島で現地調査，2020 年 10 月～ 2022 年 5 月に遠隔調査を行った [7]。本研究の調査には 4 名の話者（全員男性）に協力していただいたが，分析に用いるデータは次の 2 名の話者から聞いたものである [8]。

(6) 話者 A　崎原　用能（さきはら　ようのう）さん　1947 年生まれ男性
話者 B　田頭　政英（たがみ　まさひで）さん　1945 年生まれ男性

[7] 新型コロナウイルス感染症が広がった 2020 年 4 月以降は対面調査が困難になり遠隔調査を行ったが，遠隔調査では与那国方言辞典編纂室の上地艶子さんに録音して音声を送っていただくなど大変お世話になった。
[8] 今回対象としなかった 2 名は結果が大きく異なっていた。その原因として，世代差，地域差，個人差が考えられるが，これは今後の課題として，今回は先行研究の検証のために，先行研究とほぼ同様の結果が得られ，同一の言語と見なしてよい話者 2 名のデータを与那国方言を代表するものと仮定して分析の対象とした。

対面調査は筆者が作成した調査票に基づく面接調査で，1 対 1 での読み上げ形式で行い，リニア PCM レコーダー LS-100（Olympus 製）で録音した。遠隔調査では筆者が作成した調査票を送り，リニア PCM レコーダー H4n（Zoom 社製）で録音した音声を送付していただいた。調査内容は上野（2011, 2012）に挙がっている動詞 319 語（ただし A パターンの語は一部のみ調査）および筆者が追加した動詞 81 語と活用形である。アクセント型の認定は筆者の判断に基づく。

4.2 調査結果

上野（2011, 2012）のアクセントデータと（6）の話者のアクセントはほぼ完全に一致したため，上野（2011, 2012）にない動詞も含め，両者は同一の体系という前提でデータを提示する [9]。

4.2.1 A パターンの動詞

A パターンの交替を示した動詞の例を（7）に示す。

（7） buN「居る」，cuN「知る」，baruN「笑う」，niNduN「寝る」，hadimaruN「始まる」，||
adagiruN「伐採する」，huramuN「暗くなる」，huriNgaruN「震える」，huтaŋiruN「撒く」，
iтagiruN「（液体を）かける」，кairuN「招待する」，suruN「抱く」，tuNnaruN「退く」，…
（全 180 語）

以降，|| の前は上野（2011, 2012）に挙がっていてかつ筆者も確認したもので，後ろは筆者の調査によるものである。

4.2.2 Bb パターンの動詞

Bb パターンの交替を示した動詞の例を（8）に示す。

（8） buicaN「折る」, daNdaN「壊す」, uigaN「動かす」, uduruguN「驚く」, || aciraN「温める」,
buNgamiruN「折り曲げる」，buNкaN「放る」，duŋjaraN「大声で喚く」，gjagiruN「邪魔する」，haNкuraN「ほどく」，kabudaguN「抱える」，kiraN「ひっくり返す」，…（全 48 語）

4.2.3 Bc パターンの動詞

Bc パターンの交替を示した動詞の例を（9）に示す。

（9） aiguN「歩く」, biruN「酔う」, hiruN「行く」, huN「干す」, muiruN「生える」, naN「生む」,
|| biriruN「縺れる」，cidimiruN「片づける」，haraN「走らせる」，hidamuN「隔てる」，
imiruN「ねだる」，kaNgiruN「背負う」，kaтaN「かき混ぜる」，кubamaruN「縮こまる」，
…（全 182 語）

[9] 不使用，複数のアクセント単位に分かれるもの，2 人でアクセントが異なる項目（別カウントとする）があるため，合計は調査語数とは一致しない。

4.2.4 Bcc パターンの動詞

Bcc パターンの交替を示した動詞の例を（10）に示す。

（10） cuN「切る」，duguN「休む」，dumuN「読む」，hajuN「入る」，haNкuN「弾く」，huruN「降る」，kaguN「書く」，maтuN「待つ」，NnuN「見る」，taтuN「立つ」，turuN「取る」，uŋuN「泳ぐ」，|| ajuN「闘う」，cimuN「潜る」，hiŋuN「削る」，…（全 43 語）

4.3 調査結果の整理

Bccc パターンは kuN「来る」と umuN「思う」の他には見つからず，C パターンも aN「ある」1 語のみだった。A パターンは活用による交替はないため，これ以降は議論の対象としない。

予想通り，Bb パターンは語形が長い動詞が多く，Bcc 型は語形が短い動詞が多い。ただし，基本形の音節数をみると，Bb パターンは 2 音節～ 4 音節，Bc パターンは 1 音節～ 4 音節，Bcc パターンは 1 音節～ 2 音節となり，Bc パターンと他との区別が問題となる。動詞の音節数は，kaguN ↔ kaтi「書き，書いて」，haraN ↔ harasi「走らせ（て）」，duguN ↔ dugui「休み，休んで」のように活用によって変わり，山田ほか（2013）が主張するように，アクセント交替を含めるとそれぞれの動詞に異形態として 8 つの語幹を認める必要がある。山田ほか（2013）は「一つの代表的な活用形や語幹から全パラダイムを予測することが不可能で，少なくとも三つの活用形の情報が必要である」（p.299）とする。山田ほか（2013）には「三つの活用形」の情報が何か具体的に示されていないが，アクセントを含めると，山田ほか（2013: 300）に「（現在直説，）過去直説，現在否定直説，現在完了直説」として挙げられている活用形を指すと考えられる（現在直説は本稿の基本形に対応し，Bccc 型と C 型の区別を除き活用タイプを決定するのに必須ではない）。

しかしながら，動詞の活用クラスを示すために，「（現在直説，）過去直説，現在否定直説，現在完了直説」を全ての動詞に示すのは経済的ではない。そこで，活用タイプが決定可能な情報として原語幹を導入する。

原語幹は，「過去直説，現在否定直説，現在完了直説」（山田ほか 2013: 300）の 3 つの活用形に 1 対 1 で対応するように語幹末音を決定することで定義される。原語幹が X で終わる動詞を X 語幹動詞と呼ぶことにすると，与那国方言の動詞は（11）のように分類できる。

（11） a. （一般）子音語幹動詞
b. к 語幹動詞，g 語幹動詞，Ng 語幹動詞，ŋ 語幹動詞
c. ar 語幹動詞，ur 語幹動詞，ir 語幹動詞
d. air 語幹動詞，uir 語幹動詞
e. aj 語幹動詞，ij 語幹動詞
f. as 語幹動詞，us 語幹動詞，is 語幹動詞
g. a 語幹動詞，u 語幹動詞

表 2　与那国方言の動詞の語幹交替

活用形 / 原語幹	過去直説	現在否定直説	現在完了直説	語例
–C（子音）-	–C·i-ꞇa-N	–C·a-nu-N	–C·j-a-N, –C(·j)-u-N	dum-「読む」
–ĸ-	–ꞇ·i-ꞇa-N	–ĸ·a-nu-N	–ꞇ·j-a-N, –ꞇ-u-N	hiĸ-「突く」
–g-	–ꞇ·i-ꞇa-N	–g·a-nu-N	–ꞇ·j-a-N, –ꞇ-u-N	kag-「書く」
–Ng- [ŋŋ ~ ŋg]	–Nd·i-ꞇa-N	–Ng·a-nu-N	–Nd·j-a-N, –Nd-u-N	duNg-「濯ぐ」
–ŋ-	–d·i-ꞇa-N	–ŋ·a-nu-N	–d·j-a-N, –d-u-N	uŋ-「泳ぐ」
–ar-	–a-ꞇa-N	–ar·a-nu-N	–a-N	nar-「鳴る」
–ur-	–u-ꞇa-N	–ur·a-nu-N	–w-a-N, –u-N	tur-「取る」
–ir-	–i-ꞇa-N	–ir·a-nu-N	–j-a-N, –(j)-u-N	kir-「する」
–air-	–a-ꞇa-N ~ –ai-ꞇa-N	–air·a-nu-N	–a-N	Nĸair-「迎える」
–uir-	–u-ꞇa-N ~ –ui-ꞇa-N	–uir·a-nu-N	–w-a-N, –u-N	muir-「生える」
–aj-	–a-ꞇa-N ~ –ai-ꞇa-N	–aj·a-nu-N	–a-N	haj-「入る」
–ij-	–i-ꞇa-N	–ij·a-nu-N	–j-a-N	ij-「叱る」
–as-	–a-ꞇa-N	–a-nu-N	–as·j-a-N	sas-「指す」
–us-	–u-ꞇa-N	–(w·)a-nu-N	–us·j-a-N	tus-「倒す」
–is-	–i-ꞇa-N	–ir·a-nu-N	–is·j-a-N	kis-「耕す」
–a-	–a-ꞇa-N	–a-nu-N	–a-N	ha-「食べる」
–u-	–u-ꞇa-N	–(w·)a-nu-N	–a-N	dugu-「休む」

（11c, d）は語幹が r 終わりのため総称としては r 語幹動詞と呼び，同じく（11f）は s 語幹動詞，（11g）は母音語幹動詞と呼ぶ。母音語幹動詞に対して（11a ~ f）は（広義の）子音語幹動詞となる。この他 aN「ある」，cuN「知る」などの不規則動詞がある（与那国方言辞典編集委員会編 2021: 35）が本稿では割愛する。uir 語幹動詞の過去直説法形（本稿では過去形と呼ぶ）は上野（2012）と法政大学沖縄文化研究所（1987）には –ui-Ta-N の形のみ挙げられており，–u-Ta-N は新しい。

原語幹からは現在完了直説法形（本稿では完了形と呼ぶ）は予測できない。完了形が -a-N で終わるか -u-N で終わるかは動詞によって決まっている（山田 2016: 284–285）。-a-N は他動詞と意志的自動詞，-u-N は非意志的自動詞に対応する。ただし，ar 語幹動詞，air 語幹動詞，a 語幹動詞は動詞の意味にかかわらず完了形が -aN で終わる（cf. 中澤 2022: 104–105）。

（12）a.　saꞇjaN「裂いた」，njaN「煮た」，baN「割った」，baraN「笑った」，…
　　b.　saꞇuN「咲いた」，njuN「煮えた」，baruN「割れた」，bacuN「忘れた」，…

ところが，アクセントについては -a-N 終わりでも -u-N 終わりでも違いがないため，本稿では完了形については考慮せず，原語幹で活用タイプを表すことにする。

原語幹に対し，kaganuN「書かない」の kag·a- のように，接辞を受ける諸語幹を下地（2018: 164）にならって拡張語幹と呼ぶことにする。kaguN「書く」であれば，kag·a-，kaꞇ·i-，kaꞇ·j-，kag- などが拡張語幹となる。語幹と接辞の境界は恣意的であり，拡張語幹もそれに応じて恣意的になる。本稿では接辞の異形態が少なくなるように境界を設けた。

山田ほか（2013）は,「語幹の交替は語彙的であり, 音韻（形態）的規則によるものではない【中略】派生規則による分析はデメリットが多く，結局，規則が特定の動詞クラスや接尾辞にしか適

用されないという記述になってしまい，説明的妥当性がない」（p.299）と述べる。本稿でも，原語幹はあくまで活用形から導かれる抽象的な存在であると考える。拡張語幹は原語幹に拡張母音のような要素が付いたものとは限らず, //tur-//「取る」→ /tu-ꜭa-N/「取った」のような例もある。

活用パターンは原語幹末の音素によって大きく（s 以外の）子音語幹（〔例〕//kag-//「書く」）[10], s 語幹（〔例〕//haras-//「走らせる」），母音語幹（〔例〕//dugu-//「休む」）のように分けられる。そのため，原語幹によってアクセントパターンを分類すると，概ね表 3 のように整理できる。

表 3　原語幹の長さとアクセントパターンの関係

パターン	s 語幹	子音語幹（s 以外）	母音語幹
Bb	原語幹が 2 音節より長い	原語幹が 3 音節より長い	原語幹が 3 音節より長い
Bc	原語幹が 2 音節以下	原語幹が 2 or 3 音節	原語幹が 3 音節
Bcc	（語例なし）	原語幹が 1 音節以下	原語幹が 2 音節以下

アクセントパターンが Bb, Bc, Bcc の 272 語中 218 語（80.1%）が表 3 の分類に当てはまる。

Bc の huN「干す」と Bcc の cuN「切る」は //hus-//，//c-// と原語幹末音が異なるため，異なるアクセントパターンに属すると言える。また，haNꜭuN「弾く」（//haNꜭ-//）が kaguN「書く」（//kag-//）と同様に Bcc パターンである（他にも, duNꜭuN「茹でる」（//duNꜭ-//）や kaNduN「被る」（//kaNd-//）が Bcc パターンになる）ように，撥音は長さに影響しない可能性がある。撥音を含む 32 語が表 3 に従う一方，buNꜭaN「放る」（//buNꜭas-//，Bb パターン），suNꜭuN「引っ張る」（//suNꜭ-//，Bc パターン）などの 16 語が表 3 の例外となる。一方で，aiguN「歩く」（//aig-//）は Bcc ではなく Bc パターンであることから，二重母音は撥音と異なり，語の長さに関わる可能性がある（他にも，muiruN「生える」（//muir-//）や uiguN「動く」（//uig-//）などの二重母音を含む語が Bc パターンになる。また，uigaN「動かす」（//uigas-//）や buicaN「折る」（//buicas-//）が Bc でなく Bb となるのも同様である）。二重母音を含む 9 語中 3 語（//kair-//「帰る」，//aCirair-//「あつらえる」，//umui'Ndas-//「思い出す」）が表 3 に当てはまり，6 語（//haicarir-//「群がる」など）が例外となる。二重母音を含む語例は少ないものの，例外の方が多いことを重視すれば, 表 3 の基準を音節数ではなく母音音素数に改めた方がより適切と言える。

4.4 派生接辞が付いた形のアクセント

話者 B について，使役接辞 -amir- と受身・可能接辞 -arir- を付けた形で調査したところ，長さに応じて表 3 から予測されるアクセントで現れる場合と，長さにかかわらず Bb パターンになる場合があった。すなわち，Bcc パターンは Bc パターンまたは Bb パターンになり，Bc パターンは Bb パターンになる。

[10] 子音語幹のうち r 語幹動詞（〔例〕//tur-//「取る」）も他の子音語幹と交替形において異なる音節数になるが，少なくともアクセント上の振舞いについては他の子音語幹動詞と同様の傾向を示した。

表 4　話者 B における派生動詞のアクセントパターン

パターン	例	使役形	受身・可能形
Bb	kabudag-「抱く」	kabudag-amir-（Bb）	kabudag-arir-（Bb）
Bc	sabag-「探す」	sabag-amir-（Bb）	sabag-arir-（Bb）
Bcc	kag-「書く」	kag-amir-（Bc ~ Bb）	kag-arir-（Bc ~ Bb）
Bcc	c-「切る」	c-amir-（Bc ~ Bb）	c-arir-（Bc ~ Bb）

話者 A では，網羅的な調査はしていないものの，isimiruN「させる」，kisimiruN「耕させる」，ugimiruN「受けさせる」, haNdimiruN「脱がせる」, hajamiruN「入らせる」, kagamiruN「書かせる」，kuramiruN「来させる」，NsimiruN「見せる」，NnariruN「見える」が長さにかかわらず全て Bb 型になっており，こちらが本来の派生動詞のパターンと考えられる。

5. 考察

上記のデータをもとに，与那国方言の動詞アクセント交替の通時的考察を試みる。

5.1 与那国方言における動詞アクセントの系列の対立数

与那国方言の動詞アクセントは活用を含めると A, Bb, Bc, Bcc, Bccc, C の 6 つのパターンがあることになるが，C は 1 語，Bccc は 2 語しか存在せず，個別の例外として処理できる。その上，Bb, Bc, Bcc は，少数の例外を除いて，原語幹の長さと語幹末音によってアクセントパターンが決まるため，これをまとめて B パターンとすれば，与那国方言も原則として A パターンと B パターンの 2 つの対立があることになる。諸方言の動詞アクセントから考えて，与那国方言も本来の（あるいは通時的な）動詞アクセントの対立数は 2 つである方が自然であり，共時的にもこの 2 つが話者の脳内にあるものとみなす分析は優れているが，この仮説を検証するためには無意味語によるテストなどによって原語幹の長さでアクセントが決まっていることを示す必要があり，そのための十分な調査が行えていないため，この説は採用しない。代わりに，派生接辞によるアクセント交替と今回取り上げなかった話者のデータ [11] を参考に，現時点では折衷案として，Bc がデフォルトのパターンであり，Bb パターンは原語幹の長さから導かれるが，Bcc パターンについては Bccc パターンおよび C パターンと同様にアクセント情報が語彙的に登録されていると共時的に解釈する。通時的な例外では語彙的にアクセント情報が登録されていると見る必要がある上に，上野（1986: 8）の青森市方言の動詞の過去形のように，規則が複雑で例外が多く個別にアクセント型を記憶していると見られる例もあることから，話者は共時的に動詞が A 型, Bb/Bc 型, Bcc 型, Bccc 型, C 型のいずれかに属するのかを個別に覚えている（この情報が語彙的に登録されている）と考えても必ずしも不自然ではないためである。ただし，全てのアクセント情報を個別に覚えているわけではなく，基本パターン（与那国方言では Bc）は存在するものと考えておく。表 4 の

[11] 今回分析対象としなかった 2 人の間でも異なる点はあるが，概ね長さに関わらず同じ交替パターンとなることと，基本的に Bc パターンであったため，これが現在では基本的なパターンとなっていると判断した。例（8）（9）（10）で（9）が最多であることも，Bc パターンへの一本化のきっかけとなったか。

派生動詞も，少なくとも話者 B は，長さによって Bc パターンか Bb パターンかが規則から導かれると考える。

5.2 原語幹を想定することの是非

表 3 に示したように，動詞のアクセント交替は，単純に語の長さに基づくのではなく，原語幹末音の情報が必要になる。Bb, Bc, Bcc を共時的に 1 つのパターンとして解釈するためには，話者が原語幹に基づき（個別に記憶するのではなく）アクセントを派生させていると考える必要があるが，脳内に原語幹という抽象的な情報があるかが問題となる。原語幹はあくまで山田ほか（2013）のいう活用タイプに対応する情報であって，話者の脳内に実際にある情報がパラダイムであってもよく，その場合でもアクセントは表 3 の情報に基づいて決定されるものと解釈する。話者が活用タイプを知っていることを原語幹で示しているにすぎず，アクセント交替の説明のためにアドホックに原語幹を想定するわけではないため，不自然ではないと考える。また，「炙る」aNguN（池間 2003: 19）は日本語（共通語）アブルに対応するが，aNda「油」，niNduN「眠る」のように –bur– :: –Nd– という対応が認められるから，本来は †aNduN が期待される。しかし，aNduN > aNguN という音変化はやや不自然である。これは，基本的な活用形である連用形 [12]aNdi から，原語幹が aNd- (< *abur-) とも aNg- とも考えられることから原語幹が aNg- に置き換えられたためと考えられ，パラダイムそのものよりも，類推を生じるような派生規則に対応する原語幹が話者の脳内にある証拠と考える。また，5.1 で述べたように，共時的には動詞ごとに個別にアクセント情報が登録されているとすれば，原語幹からの（各活用形とアクセント型の）派生を仮に認めなくても，パラダイムが話者の脳内にあると想定すればよい。その場合，原語幹は単に動詞を分類するための道具という位置づけになる。

5.3 例外の解釈

調査データには，表 3 の基準に合わない例が，Bc パターンについては 181 語中 25 語，Bb パターンについては 48 語中 29 語 [13] 見られる。

（13） a. Bc パターンの例外：biruN「酔う」（Bcc を期待。以下の例も同じ），hiruN「行く」，nuruN「直る」，suNκuN「引っぱる」，waruN「いらっしゃる」，…

b. Bb パターンの例外：kabudaguN「抱える」（Bc を期待。以下の例も同じ），kiraN「ひっくり返す」，nagariruN「流れる」，nuriruN「濁る」，uduruguN「驚く」，…

（13）で挙げた語を含め，（8），（9），（10）のデータの中にも，表 3 の通りにならない例外が出てくる。これらは，例外的なアクセントパターンである Bccc, C パターンと同様に，個別にアク

[12] 動名詞（与那国方言辞典編集委員会編 2021）のように統語的には動詞であるものの連用形以外の活用形を失った語があることや連用形で文を終止できることからも，連用形が最も基本的な活用形であることがわかる。

[13] Bb パターンは例外が多くなっているが，これには 4.4 で述べた話者 A の派生動詞 9 語が含まれる。

セント情報が脳内辞書に登録されているとみなさざるを得ない。アクセント上不規則な動詞が多く存在することになるが，全ての動詞でアクセントパターンを個別に記憶しているとみなすよりは合理的と考える。また，これらの例外の一部は後述のように通時的に説明可能であり，個別の例外となっていてもおかしくない。個別に登録されているアクセントは，規則的に派生されるアクセントより優先されると言える。

5.4 アクセント交替の通時的解釈

与那国方言の Bb, Bc, Bcc のうち，少なくとも Bb と Bc は共時的に 1 つの系列と分析できることを述べた。ここでは，通時的観点から，Bcc および Bccc を含む B パターンのアクセント交替を解釈したい。

Bb, Bc, Bcc が元々 1 つのパターンだとすれば，通時的変化によって複数のパターンに分裂したことになる。Bb, Bc, Bcc の違いは表 1 の通りだが，再整理すると（14）のようになる。

（14） a. 過去接辞 -ra- が付与されたときの音調…Bb：B，Bc：B，Bcc：B
b. 否定接辞 -nu- が付与されたときの音調…Bb：B，Bc：B，Bcc：C
c. 継起接辞 -ri が付与されたときの音調…Bb：B，Bc：C，Bcc：C

過去接辞が付与された場合のアクセントは一貫して B 型になるため，通時的にも B 型が再建されるが，否定接辞と継起接辞が付いた場合のアクセントは B 型と C 型のいずれを再建すべきだろうか。

与那国方言には語形が長くなると B 型が現れる傾向が広く見られる。例えば，外来語のアクセントは，概ね 3 モーラ以下は C 型，4 モーラ以上は B 型になる（上野 2014: 75）。複合語アクセントでも，長い語形では B 型になる傾向があり（中澤 2018），上野（2014: 81）にある（15）の例からは，B 型のアクセントが改新であることがわかる。

（15） saTa]（砂糖，C）と saTakuruma_（砂糖車，B）cf. 沖永良部正名 saCta^{C}（松森 2000: 68）

沖永良部正名との対応から，単純語の C 型のアクセントが本来と思われるから，複合語で C > B と変化したと推定される。このような，元来の C 型のうち語形が長いものが B 型になるという変化が，動詞の継起形にも生じたと本稿は解釈する。継起形では，Bb パターンでのみ B 型であり，他のパターンでは C 型であるが，Bb パターンは語幹が長い動詞である。このことに基づいて，継起形は古くは C 型であり，C 型のうち語形の長いものが B 型になる変化が継起形にも生じたために，Bb パターンの動詞の継起形が B 型となったと考えることができる。継起形が古くは C 型であったとする見解は，過去接辞が付く形式と継起接辞が付く形式が古くは別の形式だったことを示唆する。なぜなら，過去形は Bb, Bc, Bcc の違いにかかわらず全て B 型である（ただし Bccc は除く）ことから，古くから B 型であったと解釈することができるからである。もし過去形（B 型）と継起形（C 型）のアクセントの違いが接辞の特性に起因するものでなければ，それは過去接辞が付く形式と継起接辞が付く形式の特性に求められる。実際に両形式が異なって

いたことを示唆する証拠は，アクセントだけでなく形態的にも認められる。turuN「取る」（//tur-//）における **tu**-ꜜtaN と **tui**-ꜜti や，turaN「あげる」（//turas-//）における **tura**-ꜜtaN と **turasi**-ꜜti のように，-ꜜta- が付くときと -ꜜti が付くときの形式が異なる場合があり，両者は別形式だったことが支持される。-ꜜta- が付く B 型の形式を（古い）連用形，-ꜜti が付く C 型の形式を中止形と呼ぶとすれば，与那国方言にはその形態的な違いはほとんど見られない（中澤 2021）が，南琉球諸語にはそれに対応する連用形と中止形に形態的な違いがある。

表 5　南琉球諸語における「書く」の連用形と中止形

	連用形	中止形	cf. 継起形
伊良部（富浜 2013）	kafu, katsï	kattʃi	———
多良間（渡久山・セリック 2020）	(kakï)	kakiː	kakittiː
石垣（宮城 2003）	kakï	kaki	kakitte
川平（加治工 1984）	kakï	kaki	kakiʃit̬i
与那国	kaꜜti	kaꜜti	kaꜜtiꜜti

与那国方言に連用形と中止形の違いがないのは，与那国方言では中止形が連用形を兼ねるようになり，本来の連用形が消失したためである（中澤 2022: 104）。しかしながら，転成名詞には古い連用形に由来する形が見られる。

（16）a.　(ubu)jaN「大病」（池間 2003: 196）vs. dami「病気」（同 : 297）
　　b.　(hai)nuguci「食べ残し」（同 : 208）vs. nugusjaN「残した」（同 : 268）
　　c.　ciN「死」（同 : 145）vs. Nni「死」（同 : 145）

dami，nugusjaN ＜ *nugusi+aN，Nni は現在の連用形と同形なのに対し，jaN，nuguci，ciN は現在の連用形に対応せず，両者は異なる形式に由来することが示唆される。南琉球諸語では中舌母音が *i に対応する（Pellard 2013）から，表 5 により（古い）連用形には *-i，中止形には *-je が再建される（中止形には口蓋化した形式が伊良部方言に見られることから *-e ではなく *-je を再建する）。aN「網」（池間 2003: 20），kaN「神」（同 : 86），naN「波」（同 : 253），kuci「腰」（同 : 127），haci「端；橋；箸」（同 : 276），uN「鬼」（同 : 67），diN「金〈ゼニ〉」（同 : 84）などにより，mi :: N，si :: ci，ni :: N の対応があることがわかるから，jaN，nuguci，ciN は（古い）連用形 *jami, *nokosi, *sini に対応する。

このように，現在の与那国方言には連用形と中止形の（形態的な）区別は見られないが，かつては別形式だった名残が，一部の活用形の分節音の違いとアクセントの違いに反映されていることになる。

Bccc パターンの動詞は過去接辞が付いた形も C 型となる点が Bcc パターンと異なるが，kuN「来る」の過去形 suꜜtaN] の形式に着目すれば，これは *ki-ta-（> ˣtaN_）のような連用形由来ではなく，*kje+wori-ta- のように存在動詞 *wor-「居る」（> buN）を含む形式に由来すると推定される（あるいは *ki+wori-ta- > *kjoïta- > suꜜtaN の可能性もある）。kuN の連用形 si は *ki ではなく *kje という形式に遡る（**kj**oo :: **s**u「今日」，**ki**mo :: **ci**mu「肝」）。suꜜtaN も *kjota- のような古形が想定され

るから，連用形ではなく中止形（あるいは *ki+wor-）由来のためにC型になると考える。同様に，umuN「思う」の過去形 umuтaN] も，*omoi-ta- ではなく *omoje+wori-ta-（あるいは *omoi+wori-ta-）のように *wor- を含む形式に対応すると推定する[14]。いずれにせよ，Bccc パターンで過去形がC型となるのは，*wor- を含んだ形式に対応するためであり[15]，Bccc は Bcc の一種と見なせる（//k(u)-//, //umu-// が Bcc になるのは表3からも期待される）。

このように，与那国方言では著しい音変化が生じた一方，アクセントは古態を保持する面がある。（13）でも，biruN「酔う」は *wepi+wor-，hiruN「行く」は *pa(s)ir-，nuruN「直る」は *na'or-，waruN「いらっしゃる」は *owar- のように，音節数の多い語形に由来し，その時代のアクセントを保持しているために例外になっていると考えられる。

また，haNкuN「弾く」（//haNк-//），duNкuN「茹でる」（//duNк-//），kaNduN「被る」（//kaNd-//）が kaguN「書く」（//kag-//）と同様に Bcc パターンになり，aiguN「歩く」（//aig-//），muiruN「生える」（//muir-//），uiguN「動く」（//uig-//）が Bcc ではなく Bc パターンであることから，*pazik- > haNк-，*jubik- > duNк-，*kabur- > kaNd- の撥音化後に現在見られるような長さによるアクセント変化が生じたと考えられる。二重母音はそれぞれが独立した音節として扱われ，母音連続（hiatus）であったか，*arik-「歩く」，*moje-「生える」のように母音間に子音があったものと思われる。

与那国方言にかつてあった連用形（*B型）と中止形（*C型）の区別は，アクセントから逆に推定できることになる。筆者の調査では，連用形に後続する形式は次のように分かれる。

（17） a. 旧連用形接続：-daтana「～ながら」，-biкi「～べき」，-Ndagi「～しよう」，=ja「～は」，=N「～も」，=du「～ぞ」，-busaN「～したい」，-ŋurisaN「～しにくい」，-dacaN「～しやすい」

b. 旧中止形接続：-bi「～ので」，-ŋasija「～すれば」，-Ndi「～ために」

（17）について，与那国方言の中だけでは循環論となってしまうが，表5のように連用形と中止形の形態的な区別が見られる他方言の形式と比較することで，両者の区別が祖語に再建されれば，与那国方言も祖語の区別を継承していると考えることができる。あるいは，最近になって研究が大きく進展した，祖語のB系列とC系列の区別がある八重山諸語（セリック他 2022）によって，連用形（と中止形）にもB系列とC系列の交替が祖語であったことが明らかになるかもしれない。いずれにせよ，このような研究テーマのためにも，動詞の活用によるアクセント交替について，八重山諸語を含む南琉球諸語，さらには北琉球，本土諸方言での広範な調査を行い，祖語での動詞アクセント交替の再建を試みることが必要である。そのためにも，与那国方言の動詞アクセントのデータが果たす役割は大きい。

[14] umuN「思う」の過去形はC型以外に umuтaN_ というB型も見られるが，B型は連用形由来の *omoi-ta- に対応すると考える。
[15] uтuN]「落ちた」< *ote+wor- のように *wor- に由来する完了形（-u-N）も同様だろう。

6. まとめと課題

本稿では与那国方言の動詞アクセントの交替について，共時的および通時的観点から分析を試みた。与那国方言に多くの交替パターンが見られるのは，与那国での改新であって，祖語には 2 つのパターンを再建すればよいことを示した。また，与那国方言にはかつて中止形と連用形の区別があったこと，二重母音と撥音では音節量の共時的扱いが異なることを主張した。
一方で，次のような点がこれからの課題として挙げられる。

（18） a. 表 3 は共時規則として複雑すぎるのではないか？
b. aN「ある」の C パターンは古態か改新か？
c. B パターンからの Bb, Bc, Bcc への派生が共時規則として認められるか？

得られたデータを例外が少なくなるように解釈したのが表 3 だが，規則として複雑すぎ恣意的な印象がある。語の長さが関わっていることは確かだが，見落としている要素がありそうだ。もしこれ以上の規則の簡略化が困難だとすれば，共時的には語彙ごとにアクセントが指定されているとみなすしかないだろう。

aN「ある」のアクセントには上野（2011）と筆者のデータとで一致しない部分があり，筆者のデータでは aru], arja] のように上野（2011）よりも C 型で一貫している。これが改新とすれば，B ＞ C という変化を認める必要が出てくる（形容詞に出てくる aN は C 型で一貫しているためそれへの類推の可能性もある）。否定接辞 -nu- が付くときの音調の再建にも関わってくる。

共時規則かどうかの判断には無意味語によるテストが考えられるが，筆者が簡単に行った範囲では，無意味語では基本形が A 型となるようだ。別の方法を考える必要がある。長い語形での C 型 ＞ B 型への改新は，外来語にも見られるなど共時的にも有効な規則と思われるが，C ＞ B の変化と動詞アクセントの交替の確立の時期，分節音の変化の時期の相対年代などには議論が必要である。これらについては稿を改めて論じたい。

参照文献

池間苗（2003）『与那国語辞典』与那国町：池間苗.
上野善道（1986）「青森市方言の動詞のアクセント」『日本海文化』13: 1–49.
上野善道（2000）「奄美アクセントの諸相」『音声研究』4(1): 42–54.
上野善道（2010a）「琉球与那国方言のアクセント資料（1）」『琉球の方言』34: 1–30.
上野善道（2010b）「与那国方言のアクセントと世代間変化」上野善道（監）『日本語研究の 12 章』504–516. 東京：明治書院.
上野善道（2011）「与那国方言動詞活用形のアクセント資料（2）」『国立国語研究所論集』2: 135–164.
上野善道（2012）「与那国方言動詞活用形のアクセント資料（3）」『琉球の方言』36: 57–91.
上野善道（2014）「琉球与那国方言のアクセント資料（3）」『琉球の方言』38: 69–92.
上野善道（2015）「琉球与那国方言体言のアクセント資料（4）」『琉球の方言』39: 165–193.
加治工真市（1984）「八重山方言概説」日野資純・飯豊毅一・佐藤亮一（編）『講座方言学 10 沖縄・奄美地方の方言』289–361. 東京：国書刊行会.
金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究　原理と方法』東京：塙書房.
下地理則（2018）『シリーズ記述文法 1　南琉球宮古語伊良部方言』東京：くろしお出版.
セリック ケナン・麻生玲子・中澤光平（2022）「八重山語のもう 1 つの 3 型アクセント体系の発見：小浜方

言の韻律体系に関する調査報告」第 240 回 NINJAL サロン（発表資料）.
渡久山春英・セリック ケナン（2020）『南琉球宮古語多良間方言辞典』立川：国立国語研究所.
富浜定吉（2013）『宮古伊良部方言辞典』那覇：沖縄タイムス社.
中澤光平（2018）「与那国方言の複合語アクセントと音韻解釈」『第 32 回日本音声学会全国大会予稿集』132–137.
中澤光平（2020）「南琉球与那国方言における動詞のアクセント交替の共時的・通時的分析」『日本言語学会第 160 回大会予稿集』286–292.
中澤光平（2021）「『どぅなんむぬい辞典』に見られる現在の与那国方言の諸特徴」日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成　令和 3 年度第 2 回オンライン研究発表会（発表資料）.
中澤光平（2022）「与那国方言の音韻変化と形態変化」『国立国語研究所論集』22: 89–111.
平山輝男・中本正智（1964）『琉球与那国方言の研究』東京：東京堂.
法政大学沖縄文化研究所（1987）『琉球の方言 12（八重山・与那国島）』東京：法政大学沖縄文化研究所.
松森晶子（2000）「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発―沖永良部島の調査から―」『音声研究』4(1): 61–71.
松森晶子（2012）「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」『音声研究』16(1): 30–40.
宮城信勇（2003）『石垣方言辞典』那覇：沖縄タイムス社.
山田真寛・ペラール，トマ・下地理則（2013）「ドゥナン（与那国）語の簡易文法と自然談話資料」田窪行則（編）『琉球諸語の言語と文化　その記録と継承』291–324. 東京：くろしお出版.
山田真寛（2016）「ドゥナン（与那国）語の動詞形態論」田窪行則・ホイットマン，ジョン・平子達也（編）『琉球諸語と古代日本語―日琉祖語の再建にむけて』259–289. 東京：くろしお出版.
与那国方言辞典編集委員会（編）（2021）『どぅなんむぬい辞典　第 2 版』八重山郡与那国町：与那国町教育委員会.
Pellard, Thomas (2013) 'Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system.' In: Bjarke Frellesvig & Peter Sells (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 20: 81–96.

Diachronic Study on the Tonal Alternation in the Verbal Paradigm of Southern Ryukyuan Yonaguni Dialect

NAKAZAWA Kohei

Shinshu University / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

In the Southern Ryukyuan Yonaguni dialect, there are six tonal patterns in verb paradigms: A, Bb, Bc, Bcc, Bccc, and C. Most of the Japanese and Ryukyuan languages have only two pattern distinctions in the series of verb accents, and it is unclear whether the distinction between the six patterns of the Yonaguni dialect is retention or innovation. In this article, the differences between Bb, Bc, and Bcc, excluding the exceptions Bccc and C, among the non-A type alternation patterns, have been generated based on the length of the stem and the final segment of the stem from a diachronic standpoint. Therefore, it is an innovation that occurred in the dialect. Additionally, based on verb accents and conjugations, the Yonaguni dialect used to distinguish between sequential and conjunctive forms, the exceptions to accents can be explained diachronically, and diphthongs and moraic nasals are treated differently in terms of syllabification. Verb accent alternation supports the accent change presumed in the Yonaguni dialect of type C > type B, which is also found in compound words.

Keywords: Yonaguni dialect, verb, conjugation, tonal alternation, tonal change

【資料】

筆者の調査による動詞活用のアクセント資料を提示する。この資料は与那国方言辞典編集委員会（2021）の補完の意味がある。与那国方言辞典編集委員会（2021）はアクセントの提示方法の都合上，A パターンと C パターン以外が区別できないためである。ただし，話者 B は先行研究からずれる例が比較的多いため，資料は話者 A のアクセントを基本として，話者 B にのみ確認した項目は頭に T を付けた。両者で一致しない場合も話者 B のアクセントを T で示した。

	意味	語形	原語幹	パターン	備　　考
	呼ぶ	abiruN	abir-	Bc	
	集まる	acimaruN	acimar-	Bc	
T	あつらえる	acirairuN	acirair-	Bc	acira-, acirar- とも
	温める	aciraN	aciras-	Bb	
	伐採する	adagiruN	adagir-	A	
T	交渉する	adaguN	adag-	A	adaᴛ-, adaᴛir- とも
	宥める	adaNᴋuN	adaNᴋ-	A	
T	崇める	agamiruN	agamir-	A	
	歩く	aiguN	aig-	Bc	
	よじ登る	ajaŋaruN	ajaŋar-	Bb	
T	戦わせる	ajamiruN	ajamir-	Bc	
	ぶつける	ajaN	ajas-	A	
	闘う	ajuN	aj-	Bcc	
	（酒が）熟成する	amariruN	amarir-	A	
	浴びる	amiruN	amir-	A	
	ある	aN	ar-	C	不規則動詞
T	溢れさせる	aNdaN	aNdas-	A	
	溢れる	aNdiruN	aNdir-	A	
	炙る	aNguN	aNg-	Bcc	
	預かる	aNᴋaruN	aNᴋar-	Bc	
	預ける	aNᴋiruN	aNᴋir-	Bc	
T	掘る	asaruN	asar-	Bc	
	当てになる	aᴛinaruN	aᴛi+nar-	A+Bcc	2 単位形
	魚を捌く	badaruN	badar-	A	
T	怒らせる	badiraN	badiras-	A	
T	腹が立つ	badiruN	badir-	A	
T	沸かす	bagaN	bagas-	Bc	
T	奪う	baguN	baga-	Bcc	
	割る	baicaN	baicas-	A	
	湧き出る	baNdiruN	baNdir-	A	
	沸かす	baNgiraN	bangiras-	A	
	くすぐる	baNguruN	baNgur-	A	
	笑う	baruN	bara-	A	
T	鞭で打つ	bidagiruN	bidagir-	A	
	からかう	bidaguruN	bidagur-	Bc	
	飽きる	biNdiruN	biNdir-	Bc	
	開く	biragiruN	biragir-	A	

	縺れる	biriruN	birir-	Bc	
T	凹む	biriruN	birir-	A	
	植える	biruN	bir-	A	
	酔う	biruN	bir-	Bc	
T	据え付ける	bisiruN	bisir-	A	
	酔い潰れる	bitariruN	bi+tarir-	C+Bc	
T	飛び上がる	buduNgaruN	buduNgar-	A	
T	放り込む	buduNкaN	buduNкas-	A	
T	飛び込む	buduNкuN	buduNк-	A	
	小降りになる	buhariruN	bu+harir-	A+Bc	
	折る	buicaN	buicas-	Bb	
	居る	buN	bur-	A	不規則動詞
	折り曲げる	buNgamiruN	buNgamir-	Bb	
	化膿する	buNgiruN	buNgir-	A ~ Bc	A と Bc の併用
	放る	buNкaN	buNкas-	Bb	
	居させる	buramiruN	buramir-	A	
T	疲れ果てる	buтaruN	buтar-	A	
	刺す	camiruN	camir-	Bc	
T	閉ざす	caNguN	caNg-	A	
T	腐らせる	caraN	caras-	Bc	
	腐る	cariruN	carir-	Bc	
	申しあげる	cariruN	carir-	A	
T	ぶっかける	ciciraN	ciciras-	Bb	
T	切れる	ciciruN	cicir-	A	
	こする	cicuN	cic-	A	
T	こする	cicuN	cic-	Bb	
	片づける	cidimiruN	cidimir-	Bc	
T	煎じる	cidiruN	cidir-	Bc	cidirir- とも
	萎む	cigumaruN	cigumar-	A	
	萎む	cigumuN	cigum-	A	
	接ぐ	ciŋuN	ciŋ-	A	
	終える	cimaN	cimas-	Bc	
T	潜らせる	cimaN	cimas-	Bc	
	潜る	cimuN	cim-	Bcc	
T	揃える	cinaN	cinas-	A	
T	饐える	ciruN	cir-	Bc	
	務める	ciтumiruN	ciтumir-	Bc	
	啜る	cucuN	cuc-	A	
	啜る	cucuruN	cucur-	A	
T	水切りする	cumuraN	cumuras-	Bb	
	切る	cuN	c-	Bcc	
	着る	cuN	c-	A	
	知る	cuN	c-	A	不規則動詞
	安くする	dacimiruN	dacimir-	Bc	
T	抱く	daguN	dag-	A	
T	痛める	damaN	damas-	Bc	
T	黙る	damaruN	damar-	A	

T	騙す	damaN	damas-	A	
	痛む	damuN	dam-	Bcc	
	壊す	daNdaN	daNdas-	Bb	
	破れる	daNdiruN	daNdir-	Bc	
	暗くなる	daNnaruN	daN+nar-	A+Bcc	
T	柔らかくなる	daraguN	darag-	A	
	行かせる	daraN	daras-	A	
T	よろめく	diduriruN	didurir-	A	
T	よく実る	digaN	digas-	Bc	
	できる	digiruN	digir-	Bc	
	茹でる	dudiruN	dudir-	Bc	
T	滞在する	dudumuN	dudum-	Bc	
	怒鳴りちらす	duŋjaraN	duŋjaras-	Bb	
	大声で喚く	duŋjaruN	duŋjar-	Bc	
	休む	duguN	dugu-	Bcc	
T	横たわる	duguтaruN	duguтar-	A	
	読む	dumuN	dum-	Bcc	
	結う	duN	du-	A	
	汚れる	duNguriruN	duNgurir-	A	
	揺する	duraN	duras-	A	
	寄る	duruN	dur-	A	
T	許す	duruN	durus-	Bc	
T	落胆する	gaburiruN	gaburir-	Bc	
	曲げる	gaNmiruN	gaNmir-	A	
	邪魔する	gjagiruN	gjagir-	Bb	
	進んでやる	habaguN	habag-	Bc	
	始まる	hadimaruN	hadimar-	A	
	はかる	hagaruN	hagar-	Bc	
	弁償する	hagiruN	hagir-	A	
	禿げる	haŋiruN	haŋir-	Bc	
T	配る	haŋuN	haŋ-	A	
	群がる	haicariruN	haicarir-	Bb	
	入らせる	hajamiruN	hajamir-	Bb	
T	流行る	hajaruN	hajar-	Bc	
	入る	hajuN	haj-	Bcc	
	遠ざかる	hanariruN	hanarir-	Bc	
	外す	haNdaN	haNdas-	A	
	脱がせる	haNdimiruN	haNdamir-	Bb	
	脱ぐ	haNdiruN	haNdir-	Bc	
T	跳ね返す	hanikiraN	hanikiras-	Bb	
T	破壊する	haNкaN	haNкas-	Bb	
	弾ける	haNкiruN	haNкir-	Bc	
	裏返す	haNкuN	haNк-	Bcc	
	弾く	haNкuN	haNк-	Bcc	
	ほどく	haNкuraN	haNкuras-	Bb	
	ほどける	haNкuriruN	haNкurir-	Bb	
	走らせる	haraN	haras-	Bc	

T	流す	haraN	haras-	Bc	
	腫れる	hariruN	harir-	A	
	晴れる	hariruN	harir-	Bc	
T	薄く延ばす	hiciraN	hiciras-	Bb	
	隔てる	hidamuN	hidam-	Bc	
	削る	hiŋuN	hiŋ-	Bcc	
	光る	hiкaruN	hiкar-	Bc	
	突く	hiкuN	hiк-	Bcc	
T	逃がす	hiNgaN	hiNgas-	Bb	
	逃げる	hiNgiruN	hiNgir-	Bc	
T	持ち上げる	hiNgiruN	hiNgir-	A	
	減らす	hiNnaraN	hiNnas-	A	
	減る	hiNnaruN	hiNnar-	A	
	押さえ込む	hiNтaкumiruN	hiNтaкumir-	A	
	冷やす	hiraN	hiras-	Bc	
	行く	hiruN	hir-	Bc	
T	成長する	huduiruN	huduir-	A	hudur- とも
	飛び込む	huduNкuN	huduNк-	A	
T	穴を開ける	hugaN	hugas-	A	
T	穴が開く	hugiruN	hugir-	A	
	掃く	huguN	hug-	Bcc	
	散らかす	huicaraN	huicaras-	A	
T	蒸し暑い	humiguN	humig-	A	
	干す	huN	hus-	Bc	
	準備する	huNnaruN	huNnar-	Bc	
T	準備する	huNnaruN	huNnar-	A	
	暗くなる	huramuN	huram-	A	
	震える	huriNgaruN	huriNgar-	A	
T	狂う	huriruN	hurir-	A	
	降る	huruN	hur-	Bcc	
	撒く	huтaŋiruN	huтaŋir-	A	
T	ほどく	huтuguN	huтug-	Bc	
T	ひたす	huтuNкaN	huтuNкas-	A	基本アクセント化か
T	ふやける	huтuNкuN	huтuNк-	Bc	
T	威張る	ibar-	ibar-	A	
	生きる	iкuN	iк-	Bcc	
T	炒る	iкuN	iк-	Bc	
	喪に服する	imikaNduN	imi+kaNd-	B+Bcc	
	ねだる	imiruN	imir-	Bc	
T	選ぶ	irabuN	irab-	Bc	
	煎る	iruN	ir-	Bc	
	刺す	iruN	ir-	Bc	
	する	iruN	is-	Bc	
	借りる	iruN	ira-	A	
	させる	isimiruN	isimir-	Bb	
	交差する	iтadiruN	iтadir-	A	
	（液体を）かける	iтagiruN	iтagir-	A	

T	ひび割れる	iɪamiruN	iɪamir-	Bc	iɪam- とも
	（液体を）こぼす	iɪaɪiruN	iɪaɪir-	A	
	抱える	kabudaguN	kabudag-	Bb	
T	こそぐ	kagadiruN	kagadir-	Bc	
	書かせる	kagamiruN	kagamir-	Bb	
T	燻製にする	kagaN	kagas-	Bc	
	触る	kagaruN	kagar-	Bc	
	書く	kaguN	kag-	Bcc	
	隠す	kaguN	kagus-	Bc	
	隠れる	kaguriruN	kagurir-	Bc	
	取り替える	kainaN	kainas-	A	
	招待する	кairuN	кair-	A	
	帰る	kairuN	kais-	Bc	
T	通う	kajuN	kaju-	A	
	顔を洗う	kamiruN	kamir-	Bc	
T	しまう	kamiruN	kamir-	Bc	
	噛む	kamuN	kam-	Bcc	
	鋤く	кaN	кas-	A	
T	漏らす；通す	кaN	кas-	A	
T	噛み砕く	kaNdaguN	kaNdag-	Bb	
	被る	kaNduN	kaNd-	Bcc	
	考える	kaNgaruN	kaNgar-	Bc	
	背負う	kaNgiruN	kaNgir-	Bc	
T	抱える	кaNkiruN	кaN+kir-	B+A	
	被せる	kaNsiruN	kaNsir-	Bc	
	飼う	кanuN	кana-	Bcc	
T	乾く	karaguN	karag-	A	
T	枯れる	kariruN	karir-	A	
T	縛る	karuiruN	karuir-	A	karu-, karur- とも
	刈る	karuN	kar-	A	
	掛ける	kaɪaŋiruN	kaɪaŋir-	Bc	
T	芋を潰す	kaɪaguN	kaɪag-	Bc	kaɪaɪ-, kaɪaɪir- とも
	担ぐ	kaɪamuN	kaɪam-	Bc	
	かき混ぜる	kaɪaN	kaɪas-	Bc	
	傾ける	kaɪaNкaN	kaɪaNкas-	Bb	
T	掻き寄せる	kaɪinaN	kaɪinas-	Bc ~ Bb	
	勝つ	kaɪuN	kaɪ-	Bcc	
	騒ぐ	kidiNcaraN	kidiNcaras-	A	
	蹴飛ばす	kiduŋiraN	kiduŋiras-	Bb	
	騒ぐ	kiŋuN	kiŋ-	A	
T	引っ込む	кihairuN	кi+hair-	A+Bc	
	ひっくり返す	kiraN	kiras-	Bb	
	蹴る	kiruN	kir-	Bc	
	耕す	kiruN	kis-	Bc	
	耕させる	kisimiruN	kisimir-	Bb	
	縮こまる	кubamaruN	кubamar-	Bc	
	節約する	kubamiruN	kubamir-	A	

	漕ぐ	kuŋuN	kuŋ-	Bcc	
T	越える	kuiruN	kuir-	A	
	籠る	kumaruN	kumar-	Bc	
	包む	кumuN	кum-	Bcc	
	聞く	кuN	к-	A	
	来る	kuN	k(u)-	Bccc	不規則動詞
	吹く	кuN	к-	Bcc	
T	越す	kuN	kus-	A	
T	濾す	kuN	kus-	A	
T	並べる	kunabiruN	kunabir-	A	
T	捏ねる	kunaN	kunas-	Bc	
	腰に付ける	kuNкiruN	kuNкir-	A	
	よく考える	kuNkumiruN	kuN+kumir-	A+Bc	
T	比べる	kurabiruN	kurabir-	A	
	来させる	kuramiruN	kuramir-	Bb	
	崩す	kuraN	kuras-	A	
T	転ぶ	kurubuN	kurub-	A	
	企む	kurumuN	kurum-	Bc	
	作る	кuruN	кur-	Bcc	
T	削ぐ	kusaŋuN	kusaŋ-	Bc	
	凍る	kwaruN	kwar-	Bc	
T	まぶす	mabuN	mabus-	A	
	迷う	maduruN	madur-	Bc	
	巻かせる	magamiruN	magamir-	A	
	炊く	magaN	magas-	Bc	
T	任せる	magaN	magas-	A	基本アクセント化か
	巻く	maguN	mag-	A	
	蒔く	maguN	mag-	Bcc	
	なまる	maŋuririuN	maŋurir-	A ~ Bc	
	亡くなる	mairuN	mais-	A	maisuN とも。不規則動詞
T	迷わせる	majaN	majas-	Bc	
T	擦り付ける	mamiruN	mamir-	A	
	喚き散らす	maNgiraN	maNgiras-	Bb	
T	回す	maraN	maras-	A	
T	転ばせる	marubaN	marubas-	A	
T	束ねる	maruguN	marug-	A	
T	待たせる	maтaN	maтas-	Bc	
	待つ	maтuN	maт-	Bcc	
	巡る	miŋuruN	miŋur-	A	
T	探す	miкiruN	miкir-	Bc	
	つねる	mudiruN	mudir-	Bc	
	戻す	muduN	mudus-	Bc	
	儲ける	mugiruN	mugir-	Bc	
	握る	muiruN	muir-	A	
	生える	muiruN	muir-	Bc	
	捧げる	muisiruN	muisir-	A	
	生やす	mujaN	mujas-	Bc	

T	揉む	mumuN	mum-	A	
	つねる	muNcuN	muNc-	A	
	言う	munuN	munu-	Bc	
	漏れる	muriruN	murir-	Bc	
	摘み取る	muruN	mur-	Bc	
	握る	muruN	mur-	A	
	もぐ	muruN	mur-	Bc	
	叱る	muтaкuN	muтaкa-	Bc	
T	放っておく	muтihanaN	muтihanas-	Bb	
T	持てなす	muтinaN	muтinas-	Bb	
	持つ	muтuN	muт-	Bcc	
T	寝そべる	nabaтaruN	nabaтar-	Bc	
	舐める	nabiNdiruN	nabiNdir-	Bb ~ Bc	
T	なだめる	nadamiruN	nadamir-	Bc	
T	撫でる	nadiruN	nadir-	Bc	
	流す	nagaN	nagas-	Bc	
	流す	nagaraN	nagaras-	Bb	
	流れる	nagariruN	nagarir-	Bb	
	投げる	naŋiruN	naŋir-	Bc	
	産む	naN	nas-	Bc	
T	なびく	naNкuN	naNк-	Bc	
	慣れる	nariruN	narir-	Bc	
	ねじる	nidiruN	nidir-	Bc	
T	我慢する	nidiruN	nidir-	Bc	
	願う	niŋuN	niŋa-	Bcc	
T	近づく	niкiruN	niкir-	A	
	寝る	niNduN	niNd-	A	
T	延ばす	nubaN	nubas-	Bc	
T	選び取る	nudimuN	nudim-	Bc	
	抜ける	nuŋiruN	nuŋir-	Bc	
T	温まる	nugumuN	nugum-	Bc	
	貫く	nuguN	nug-	A	
	残す	nuguN	nugus-	Bc	
	抜く	nuŋuN	nuŋ-	Bcc	
T	欺く	nuŋuN	nuŋ-	Bc	
T	差し込む	nuguriruN	nugurir-	Bc	
	縫う	nuN	nu-	Bcc	
	伸びる	nuN	nu-	Bcc	
T	悪口を言う	nuriruN	nurir-	A	
	濁る	nuriruN	nurir-	Bb	
T	濁る	nuriruN	nurir-	Bc	
	直る	nuruN	nur-	Bc	
T	のさばる	nuтabaruN	nuтabar-	A	
T	糸を通す	nuтaŋiruN	nuтagir-	A	
	萎む	NbumaruN	Nbumar-	A	
	蒸す	NbuN	Nbus-	Bc	
	絞る	NburuN	Nbur-	Bc	

	刻む	NdamuN	Ndam-	A	
	出す	NdaN	Ndas-	Bc	
	言う	NduN	Nd-	Bc	不規則動詞
T	たかる	NgaruN	Ngar-	A	
T	差し込む	NgiruN	Ngir-	A	
T	滑る	NguriruN	Ngurir-	Bc	
T	沈める	NKaN	NKas-	A	
T	沈む	NKiruN	NKir-	A	
	満ちる	NKuN	NK-	Bcc	
	束ねる	NmaNKiruN	NmaNKir-	Bc	
	編む	NmuN	Nm-	Bcc	
	履く	NmuN	Nm-	A	
	曇る	NmuriruN	Nmurir-	Bc	
	見える	NnariruN	Nnarir-	Bb	
	見る	NnuN	Nn-	Bcc	
	見せる	NsimiruN	Nsimir-	Bb	
T	踏みつける	NTAKuraN	NTAKuras-	A	
	釣る	PaN	Pas-	Bc	
	平らにする	PiraNKaN	PiraNKas-	Bb	
	噛み付く	PuicuN	Pui+c-	A+Bcc	
	釣れる	PuN	P-	Bcc	
	食う	PuruN	Pur-	Bcc	
	吸う	PuruN	Pur-	A	
	探し当てる	sabaguN	sabag-	Bc	
T	訪問する	sabaguN	sabag-	Bc	
T	触る	sabaruN	sabar-	A	
T	解明する	saburagiruN	saburagir-	Bb	
T	探す	saduruN	sadur-	A	
	下がる	saŋaruN	saŋar-	Bc	
	下げる	saŋiruN	saŋir-	Bc	
	冷ます	samaN	samas-	Bc	
	色が褪せる	samiruN	samir-	Bc	
	指す	saN	sas-	Bc	
T	（薪を）くべる	saNbiruN	saNbir-	Bc	
	引きずる	saNKuN	saNK-	A	
	（薪等を）割る	saruN	sar-	Bc	
T	伐る	saruN	sar-	Bcc	
	狭める	sibamiruN	sibamir-	Bc	
T	涼む	sidamuN	sidam-	Bc	
T	頑張る	siParuN	siPar-	A	
	集る	sisiruN	sisir-	Bc	
T	ほじくる	sisiruN	sisir-	Bc	
T	準備する	siTaguN	siTag-	A	
T	清める	siTamiruN	siTamir-	Bc	
T	古ぼける	siTariruN	siTarir-	Bc	
	広げる	suŋiruN	suŋir-	A	
T	染まる	sumaruN	sumar-	A	

	引っ張る	suNкuN	suNк-	Bc	
T	準備する	suraN	suras-	A	
	集まる	suriruN	surir-	A	
T	揃える	suriruN	surir-	Bc	
	抱く	suruN	sur-	A	
T	束ねる	tabaruN	tabar-	Bc	
	平たくする	тabiraNкaN	тabiraNкas-	Bb	
T	蓄える	taburuN	tabur-	Bc	
T	煙に巻く	taburuNкaN	taburuNкas-	A	
T	訪問する	taduruN	tadur-	A	
	捻挫する	taŋaN	taŋas-	Bc	
T	企む	tagumuN	tagum-	Bc	
T	せびる	taŋuruN	taŋur-	A	
	たぐる	taŋuruN	taŋur-	Bc	
T	焚き付ける	taкiruN	taкir-	A	
	真っすぐにする	tamiruN	tamir-	Bc	
T	用心する	taNkiruN	taNkir-	A	
	醸造する	tariruN	tarir-	Bc	
	助かる	tasiкaruN	tasiкar-	Bc	
	助ける	tasiкiruN	tasiкir-	Bc	
T	立たせる	taтaN	taтas-	Bc	
	立てる	taтiruN	taтir-	Bc	
	立つ	taтuN	taт-	Bcc	
	引く	тiкiruN	тiкir-	A	
T	縛る	тiNguN	тiNg-	A	
	すぼむ	тiNтiruN	тiNтir-	Bb	
T	すぼむ	тiNтiruN	тiNтir-	A	
T	照らす	tiraN	tiras-	Bc	
	照る	tiruN	tir-	Bc	上野（2012）は Bcc
T	喚き散らす	tjaŋiraN	tjaŋiras-	A	
T	落ち着く	tudimaruN	tudimar-	A	
T	尖る	tuŋaruN	tuŋar-	Bc	
T	あがめる	tujumuN	tujum-	Bc	
T	探す	tumiruN	tumir-	A	
	出る	tuNdiruN	tuNdir-	A	
	振り向く	tuNкaruN	tuNкar-	A	
	退く	tuNnaruN	tuNnar-	A	
	やる	turaN	turas-	Bc	
	取る	turuN	tur-	Bcc	
T	朽ちる	тuтiruN	тuтir-	Bc	
	鈍る	twaruN	twar-	Bc	
	映る	uciruN	ucir-	Bc	
T	大損させる	udugaN	udugas-	A	
	埋める	udugumiruN	udugumir-	A	
T	脅す	uduN	udus-	A	
	驚かす	udurugaN	udurugas-	Bb	
	驚く	uduruguN	udurug-	Bb	

T	空にする	uŋaN	uŋas-	A ~ Bc	
	受けさせる	ugimiruN	ugimir-	Bb	
	受ける	ugiruN	ugir-	Bc	
	起きる	ugiruN	ugir-	Bc	
	葺く	ugiruN	ugir-	Bc	
	起こす	uguN	ugus-	Bc	
	泳ぐ	uŋuN	uŋ-	Bcc	
T	空になる	uŋuN	uŋ-	A ~ Bc	uŋanuN_ は他動詞アクセントか
T	起こる	uguriruN	ugurir-	Bc	
T	送る	uguruN	ugur-	A	
	追い払う	uicaraN	uicaras-	A	
	追い払う	uidaraN	uidaras-	A	
	動かす	uigaN	uigas-	Bb	
	動く	uiguN	uig-	Bc	
T	老いる	uiruN	uir-	A	基本アクセント化か
	思い出す	umui'NdaN	umui'Ndas-	Bb	
	思う	umuN	umu-	Bccc ~ Bcc	
	思う	umuruN	umur-	Bc	
	追う	uN	u-	A	
	伏せる	uNкiruN	uNкir-	A	
	織る	uruN	ur-	Bcc	
	櫛を髪に通す	usaŋiruN	usaŋir-	A	
T	押し上げる	usaŋiruN	usaŋir-	A	
	侮る	usaruN	usar-	A	
	押さえる	usiкiruN	usiкir-	A	
	俯く	usubuN	usub-	A	
T	慎む	usuriruN	usurir-	A	
T	無視する	ususiruN	ususir-	A	
	打ちのめす	uтicaraN	uтi+caras-	C+A	
	打ち転がす	uтimarubaN	uтi+marubas-	C+A	
	落ちる	uтiruN	uтir-	Bc	
	置く	uтuguN	uтug-	Bc	
	打つ	uтuN	uт-	Bcc	
	落とす	uтuN	uтus-	Bc	
	追い返す	waŋiruN	waŋir-	A	
	いらっしゃる	waruN	war-	Bc	